

ニホンザル餌付け群におけるメスの繁殖に影響をおよぼす社会的要因

濱井美弥(東大・理)

長野県の地獄谷野猿公苑で、これまで24年間にわたって、継続的に観察が続けられ、母系血縁関係が詳細にわかっている志賀A1群(213頭)を対象に、オトナメスの社会交渉を、敵対交渉を中心として観察した。志賀A1群の7つの母系血縁集団の中で、最も優位かつ繁栄しているトモエ家系から、年令・子どもの数・家系内の順位が異なっている子持ちメス8頭をターゲットに選んで個体追跡したが、その結果、以下のような傾向が見られた。

まず、ターゲットは全員、攻撃されるよりする方が多かった。これは、全員が最優位家系のメンバーであるためと思われるが、ターゲット間では、攻撃頻度は高順位・高齢の個体ほど高く、被攻撃頻度は、若い個体で高くなっていた。

さらに、攻撃する相手は、高順位のターゲットでは、同じトモエ家系のメスやコドモが多かったが、低順位のターゲットは、他家系のメスやコドモになることが多かった。

ターゲット以外の個体が闘争しているときのターゲットの反応を、ターゲットの順位と、闘争の当事者との血縁関係で分析すると、トモエ家系のメンバーどうしの闘争には、近縁者が攻撃されている場合ほど関心を持つが、低順位個体では、介入が抑制されていた。他家系の個体が血縁者を攻撃しているときは高順位個体が関心を持つが、血縁者が他家系の個体を攻撃したり、他家系間で闘ったりした場合は、低順位個体が関心を持った。低順位個体は、毛づくろいも他家系の個体とすることが多く、トモエ家系では、低順位個体が周辺に押し出されていると考えられる。

他に、アドリブ観察などから、オトナオスがオトナメスと異なる介入の傾向を持つらしいことや、オトナメス内でも、その年齢によって、社会交渉のもち方が違うらしいことも示唆されたが、これらについても、さらに調査を進める予定である。

岡山県北部のニホンザル集団における社会的交渉にみられる優劣関係の調査

渡辺義雄(美作女子大)・待田昌二・今川真治(阪大・人間科学)

本年度は、岡山県真庭郡勝山町に生息するニホンザル餌付け自然集団と勝山町に隣接する大佐町に生息する自然集団を観察した。餌付け集団では、給餌場面で生起する反発的相互作用の観察を行い優劣順位の指標となる行動を比較検討し、優劣順位の確定を試みた。全個体の順位の再確認について、現在、資料を集積している段階である。また、餌付け集団では給餌場面において全集団成員の空間的近接を記録し、給餌場面における未成体の個体関係が優劣順位とどのように関わっているかを分析した。その結果、中・低順位の未成体は高順位の未成体よりも早期に母親との伴食関係がみられなくなることで、中・低順位の未成体雌の多くが中心部成体雄と伴食関係を結ぶことが明らかになった。同じ餌付け集団で周辺化の過程にある準成体雄の観察を行った結果、雄の離脱には母親の優劣順位を背景とした雄の生育歴と母親の不在が大きな影響を与えていることも明らかになった。このように未成体は母親に依存した優劣関係の中で社会的交渉を持っている。

自然集団の観察では、調査地域に生息するニホンザル集団の遊動域と個体数の概略が明らかになった。集中的に調査を行ったつづら畑の谷には、谷をはさんで南と北に一群ずつがおり、それぞれ30頭前後の個体数と思われた。これらの集団の観察中に、vocal aggressionの量が集団によって違うことが認められた。今後はこの点にも注目して観察を行っていく予定である。

本年度は、この他に放飼集団での観察も行った。放飼集団では、成体雌のloser supportの多くが血縁個体、なかでも未成体の子に向けられる場合が多いことや α -maleが最も頻繁にloser supportを示すことなどがわかった。今後も、3個体以上の関わる争いについての分析を中心に行っていく。